

423 ヒト乳汁中の副甲状腺ホルモン関連
蛋白 (PTHrP)の推移・意義に関する検討

徳島大学医学部産科婦人科学教室

上村浩一, 米田直人, 桑原章, 田村紀子,
斎藤誠一郎, 安井敏之, 漆川敬治,
東敬次郎, 荷原稔, 青野敏博

〔目的〕 Parathyroid hormone-related peptide (PTHrP) は悪性腫瘍に伴う高Ca血症の主要原因因子であるが現在ほとんどの正常組織でもその発現が認められており, 特に乳汁中には多量に存在する。今回我々はヒト乳汁中のPTHrPの意義を知る目的で, 産褥6カ月間にわたる推移とともに乳汁中の総蛋白, カルシウム(Ca)濃度との相関や乳汁分泌量との関係等について検討した。〔方法〕 N端PTHrPは(1-34)と(50-83)を認識する抗体を用いたIRMA法にて, C端PTHrPは(109-141)を認識する抗体を用いた2抗体RIA法にて測定した。〔成績〕 1) 乳汁中のN端PTHrP, C端PTHrP濃度ともに分娩直後は低く産褥10日目までほぼ直線的に増加し各々 $13,865 \pm 2,401$ pmol/L (mean \pm SE), $56,393 \pm 11,306$ pmol/Lに達した。その後N端PTHrP濃度ほぼそのレベルを長期にわたって維持し産褥6カ月目でやや低下した。C端PTHrP濃度はそのレベルをしばらく維持した後産褥30日目から産褥6カ月にかけて徐々に低下した。また両者の濃度間には有意な相関 ($r=0.642$)を認めた。2) 乳汁中の総蛋白とPTHrP濃度には有意な相関を認めなかった。3) 乳汁中Ca濃度はC端PTHrP濃度とは有意な相関 ($r=0.422$)を認めたが, N端PTHrP濃度とは相関を認めなかった。4) PTHrP濃度と乳汁分泌量には相関を認めなかった。〔結論〕 乳汁中のPTHrP濃度の推移は総蛋白濃度の推移に伴う二次的なものではなく, 乳汁分泌を促す血中PRLの反射性上昇が減少する時期でもPTHrPはほぼ一定のレベルで推移することより, 乳汁分泌維持作用を有する可能性も考えられた。またPTHrPのC端部にCaを乳汁中へ輸送するという独自の作用のある可能性が示唆された。

424 原発性抗リン脂質抗体症候群における
IgG subclassに関する検討

長崎大

河野雅洋, 宮村泰豪, 増崎英明, 石丸忠之

〔目的〕 原発性抗リン脂質抗体症候群 (primary antiphospholipid syndrome : PAPS) のIgG subclass (IgGs) を測定し, β_2 -glycoprotein I 依存性抗cardiolipin抗体 (抗 β_2 GP I抗体) との関連について検討した。〔方法〕 Prednisolone (PSL) 療法を施行した抗 β_2 GP I抗体が陽性のPAPS 8例を対象とし, PSL投与前および投与後に経時的に採取した血清44検体の抗 β_2 GP I抗体およびIgGsをELISA法により測定した。また, IgGsの正常範囲を決定するために, 健常婦人52例のIgGsを測定し, その5~95パーセントイルを正常範囲とした。なお, 統計学的検討にはSpearmanの順位相関係数を用いた。〔成績〕 PSL投与前における抗 β_2 GP I抗体は $48.3 \sim 1552.0$ U/mlであった。また, IgGsは, IgG1が $526.3 \sim 1008.5$ mg/dl, IgG2が $365.3 \sim 741.1$ mg/dl, IgG3が $19.1 \sim 74.1$ mg/dl, IgG4が $5.7 \sim 33.0$ mg/dlであり, すべて正常範囲と判定された。44検体の抗 β_2 GP I抗体とIgGsとの順位相関係数は, IgG1が 0.340 ($p=0.0257$), IgG2が 0.488 ($p=0.0014$), IgG3が 0.607 ($p<0.0001$), IgG4が 0.252 ($p=0.0982$)であった。〔結論〕 PAPSでは, ポリクローナルにB細胞が活性化しているSLEの場合と異なり, 抗 β_2 GP I抗体価が高値の例であってもIgGs値は正常範囲にあると思われた。また, 抗 β_2 GP I抗体との関連では, 抗 β_2 GP I抗体とIgG1, IgG2およびIgG3との間には有意な相関がみられ, IgG4との間には有意な相関がみられなかった。このことは抗 β_2 GP I抗体がIgG1, IgG2およびIgG3に分布している可能性があり, とくにIgG3との関連が強いことを示唆するものと考えられた。